



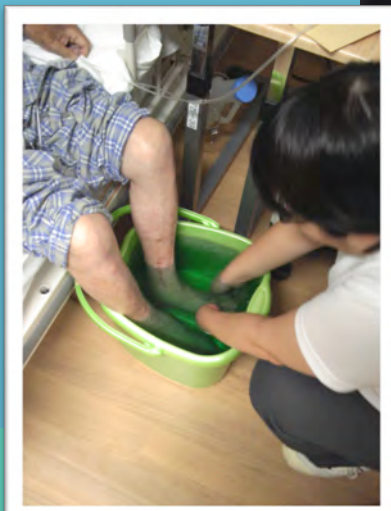
独立行政法人 国立病院機構

四国子どもととなの 医療センター

アートプロジェクト

—今月のショット—

成人病棟でのアートボランティア



2016年 8月号

—院内の小さな声から—

番組を観た。という看護学生さんがボランティア登録してくれました。彼女は「自分に何が出来るのかわからないので。」と、成人病棟の患者さんに対して「足湯」のボランティアを引き受けてくれました。まずは病棟師長さんをお願いして長期入院している患者さんの中で希望者を探してもらいます。そして、アロマオイルの入ったお湯を持って病室を訪問します。どこのおうどん屋さんかおいしいとか、長いこと入院したら足腰が弱くなってだめだ。とか、たわいもない話をしながら、足を洗って差し上げます。指の間まで丁寧に。ただ、それだけです。患者さんはいつの間にかすっかりリラックスして「こんなことまでしてもらって。ありがとう。ありがとう。」と何度もお辞儀して、病室を出てゆく看護学生さんの後ろ姿に手を合わせていました。看護学生さんは額の汗をぬぐいながらそれはそれは晴れやかな笑顔を見せてくれました。



作品名 M
作家名: 林 哲夫

—アートにできること—

当院のアート活動を紹介した特集番組「病院にアートがあるということ」がEテレで放送されてから全国各地の方からお問い合わせいただくことが多くなりました。そのほとんどが病院でのアート活動に対する共感や前向きなご意見、ご支援で、ほっとしています。特に患者として入院経験がある人にとっては病院の環境が患者の心やその家族の心に及ぼす影響について、医療者側の理解と配慮の有無が、病気の回復に大きく左右すると感じている方が多いようです。当院がアートを導入していることが「患者を個として尊重している」という印象で受け止められているようです。私もことあるごとに「病院にアートがあることの意味って何だろう」と考えます。その解はつかんだと思った途端にすっと、手の中をすり抜けてしまうかすみのようなものですが、それでも最近はおぼろげながら「患者と医療者の双方を人として尊重するためのもの」なのではないかと思っています。美しく整えられた環境で働くこと。治療を受けること。それは自分が必要とされ、大切にされていると感じるきっかけになります。

大学や病院からの見学希望者の数も増えました。沖縄や北海道から遠路はるばる来られる方もいます。そのほとんど全ての方が「病院にアートを導入したい」と思っているらしいです。そしてまた、ほとんど全ての方が「アートを導入する予算がない」と悩んでいるらしいです。確かに当院は開院に際し、多くの費用を費やしました。しかし、はじめから多くの予算が用意されていた訳ではありません。始まりは8年前、一つの病棟の壁画制作だったのです。そのプロジェクトで患者さんとスタッフがボランティアさんや画家さんと一緒に壁画を描いたことがきっかけでした。一緒に壁画制作を体験することで病棟に対する愛着が生まれ、壁を大切に作る気持ちが生まれたのです。大切なのはあきらめないで小さな一歩を踏み出すことだと思います。

コラージュはふとしたきっかけで始めましたが、いちばん熱中していた時期の作品です。色、形、質感の取り合わせには興味が尽きません